

里西遺跡発掘調査現地説明会資料

令和5年(2023年)1月29日(日)／公益財団法人滋賀県文化財保護協会

遺跡の概要と調査の概要

遺跡の概要 里西遺跡は県南部の大津市稻津・里地先一帯に所在する遺跡です。琵琶湖から流れ出す瀬田川の東側に位置します。遺跡の北側には瀬田川へと合流する大戸川が流れ、南側には田上丘陵が連なっています。遺跡が立地する場所は、大戸川などの河川によって形成された田上(たなかみ)平野にあたり、現在ものどかな水田が広がる場所です。この里西遺跡では、これまでに縄文時代晚期の溝、平安時代の掘立柱建物などが大津市教育委員会の調査によって確認されました。

調査の概要 このたび、埋蔵文化財包蔵地である里西遺跡の範囲内において、滋賀県大津土木事務所が実施する県道南郷桐生草津線補助道路整備工事が計画されました。そのため、滋賀県文化スポーツ部文化財保護課が調査主体となり、公益財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として、工事によって影響を受ける範囲を対象とした発掘調査を令和2年度から着手しました。調査対象面積は全体で7,789m²におよびますが、今年度はそのうちの3,746m²を調査対象としており、現在も調査を継続中です。令和2年度から現在にいたる調査の結果、弥生時代から室町時代にかけての集落に関する遺構を検出し、それらの遺構に伴って、さまざまな遺物が出土しています。

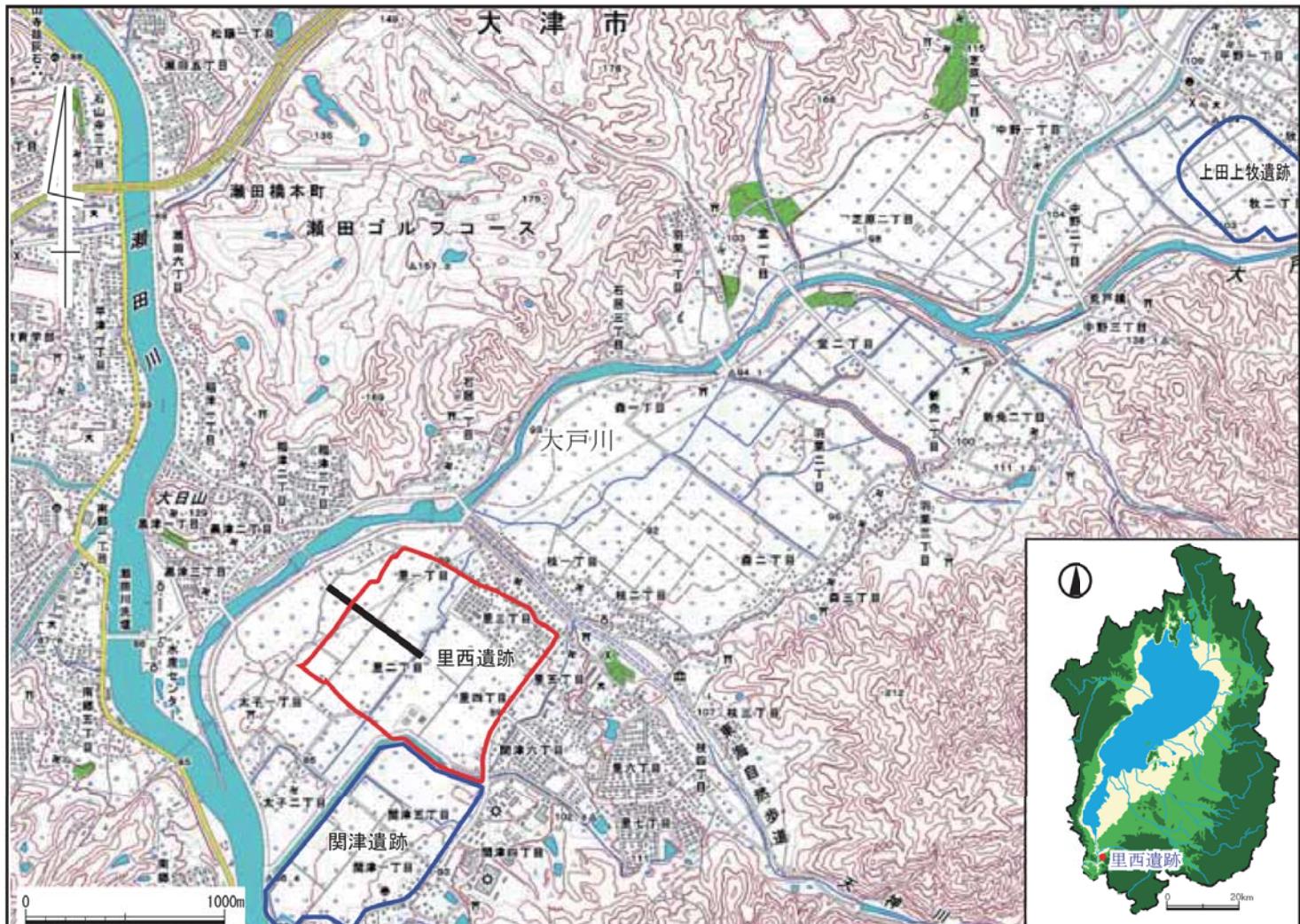


図1 里西遺跡の範囲(赤枠)と今回の調査地点の位置(黒線)、周辺の関連遺跡(青枠)

検出遺構

遺構と遺物 令和2年度からの調査の結果、弥生時代から室町時代にかけての集落に関する遺構を検出し、それらに伴って、さまざまな遺物が出土しています。

弥生時代の集落 そのなかで、弥生時代の集落は南北2か所で確認しました。北側の調査区では竪穴建物2棟、南側の調査区では竪穴建物2棟と河道1条を検出しました（令和3年度調査）。両者の集落は直線距離で約360m隔たっています。

見つかった建物 今年度の調査では、大戸川に近い北側の調査区で集落が見つかりました。竪穴建物2棟のうち、竪穴建物3は大型の五角形竪穴建物です。もう1棟の竪穴建物4は、竪穴建物3の北側で見つかった建物です。遺構の残りが悪く平面形は正確には把握できませんが、方形の可能性が高く、一辺約6mの規模が想定されます。

建物の年代 これらの年代は、出土遺物等から、五角形竪穴建物（竪穴建物3）が弥生時代終末期（3世紀前半）、竪穴建物4が弥生時代後期（2世紀）頃にそれぞれ推定できます。



写真1 弥生時代の集落が見つかった北側の調査区（北西より）

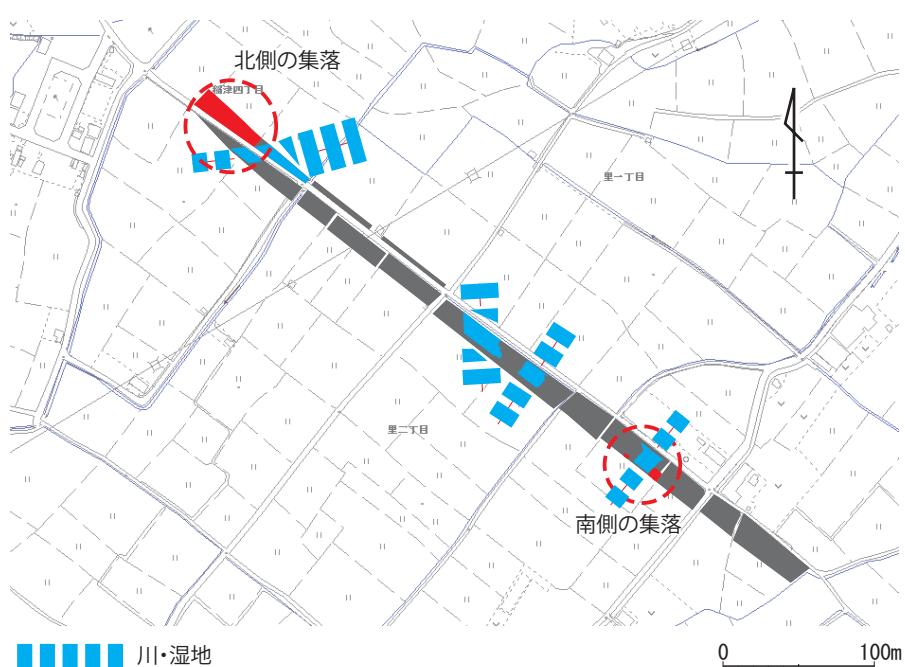


図2 調査区位置図 集落・川など分布図

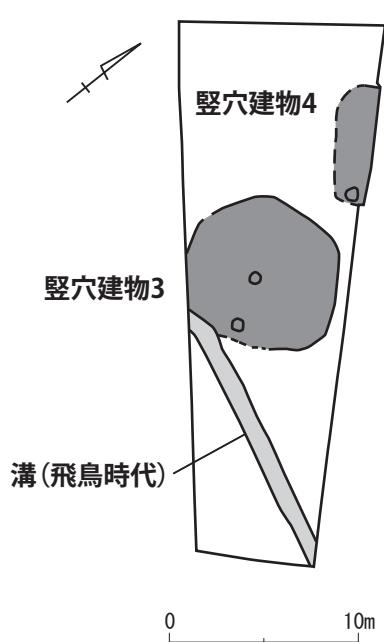


図3 遺構分布図

五角形竪穴建物(竪穴建物3) 見つかった五角形建物について説明します。

【平面形・規模】平面形は五角形を呈します。規模は8.1m～8.8m程度を測り、深さは0.1m程度でした。

【柱穴(はしらあな)】屋根を支える柱を据え付けた穴が9基見つかりました。いずれも直径0.2m～0.3m・深さ0.16m～0.62mを測ります。これらは、おおむね平面形の角に近い位置で見つかっています。

【壁溝(へきこう)】建物掘方の壁面に沿って溝が掘られています。規模は幅0.2m～0.3m、深さ(内側床面を基準)0.7m～0.12mを測ります。南東側の一部には壁溝が途切れる部分があり、この部分が入り口であった可能性が考えられます。

【炉】床面の中央で確認しました。平面形は円形を呈し、直径0.8mを測ります。周囲は熱を受けて赤く変色し、内部には炭化物が堆積しています。炉の南側には自然石が1点据えられています。なお、床面には炉以外に4か所で熱を受けて赤く変色した部分を確認しています。

【土坑(どこう)】南東側の中央付近で、人為的に掘られた穴1基を確認しました。平面形は方形を呈し、その規模は一辺0.76m、深さ0.56mです。内部からは土器が出土しました。

【整地土】地面を掘りこんだあと、土を埋め戻して床を作っています。埋め戻した土の厚さは0.1m程度でした。



写真2 見つかった五角形竪穴建物

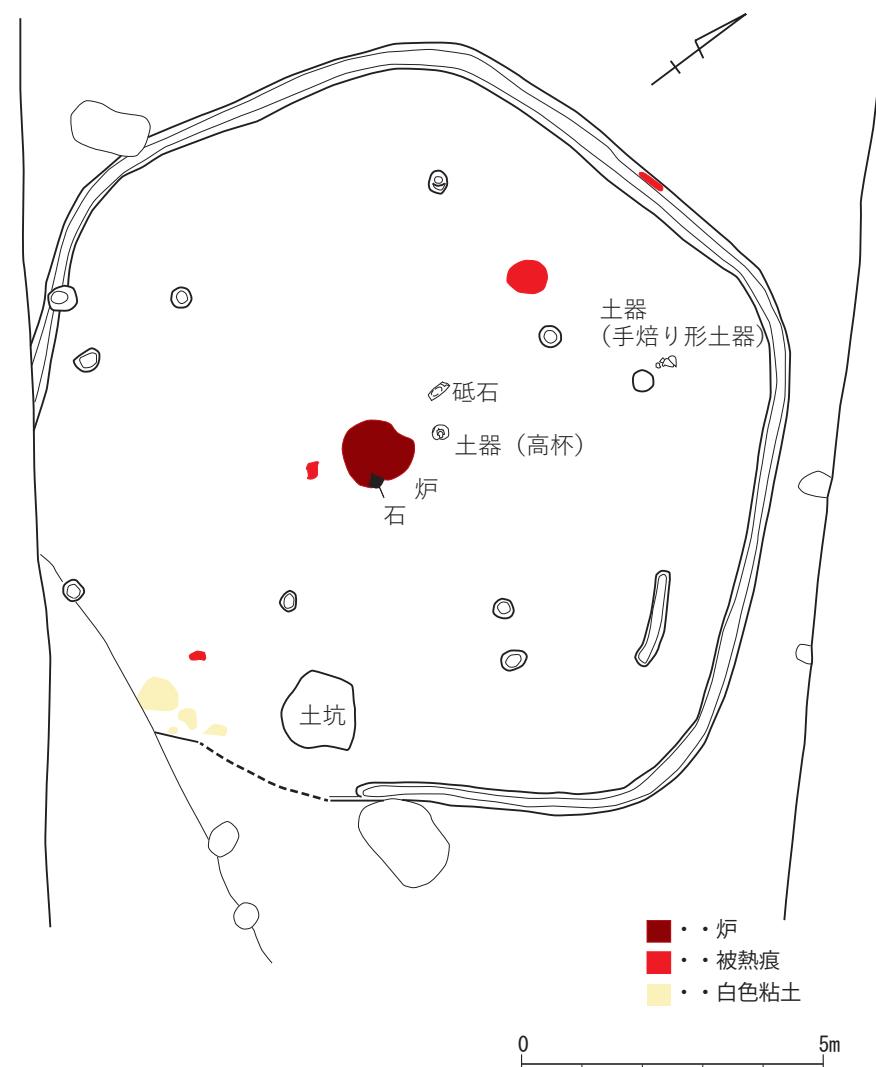


図5 五角形竪穴建物 平面図



図4 五角形竪穴建物 復元イラスト

出土遺物

堅穴建物3からは、弥生土器 壺・甕・高杯・手焙り形土器等が出土したほか、鉄製品2点・砥石1点等が出土しています。出土土器は特徴から弥生時代終末期頃のものと考えられます。



写真3 土坑の遺物出土状況



写真5 手焙り形土器 覆い部分の破片)



写真4 炉周辺の遺物出土状況



写真6 手焙り形土器の例
(草津市柳遺跡)

鉢の上に覆いをつけた土器。
手焙用火鉢に似た形をする。
どのような用途に使用されたかは不明。

写真7 砥石 縦25.7cm)

まとめ

今回の調査成果について、以下の諸点にまとめておきます。

- ①田上平野では田上丘陵近くに所在する上田上牧(かみたなかみまき)遺跡や関津(せきのつ)遺跡で同時期の堅穴建物が確認されていたほか、瀬田川との合流地点に位置する太子(たいし)遺跡でも同時期の土器が出土しています。今回の調査によって堅穴建物が見つかったことで、瀬田川に近い場所にある大戸川沿いや平野内部の微高地上に弥生時代後期の集落が営まれていたことがわかりました。現在は水田が広がる平坦な場所ですが、当時は平野のあちこちに川・湿地がみられ、その周辺の微高地上に集落が営まれる景観が復元されます。
- ②今回見つかった五角形堅穴建物のような多角形堅穴建物は、円形や方形の平面形をした堅穴建物に比べて確認例が少ないものです。これまでの確認例では、平面形が円形から方形へと移行する過渡期となる弥生時代後期に多く見られます。これらは近畿地方以外では鳥取県や岡山県などの中国地方、石川県や福井県などの北陸地方でも確認されています。

県内の多角形堅穴建物は五角形が主体で、弥生時代後期にあたる18例が確認されています。主に湖南地域に分布しており、規模は大型のものが多くみられます。田上平野に営まれた集落の五角形堅穴建物も規模が大きいことなど共通する特徴が見られます。湖南地域の弥生時代を検討するうえで、新たな資料になるといえます。なお、堅穴建物3では、中央部の炉以外にも、床面で焼土を複数確認しています。現時点ではこれらの性格を確定できていませんが、鍛冶に伴う痕跡である可能性もあり、今後の詳細な調査によって明らかにしていきたいと考えています。